

神戸大学

地域連携・観光まちづくりの
「これまで」と「これから」

FOR TOURISM EXPO JAPAN 2022

本冊子では、神戸大学の「地域連携」「観光まちづくり」の取り組みを、2人のキーパーソンへのインタビューを通してご紹介します。

神戸大学は2003年の「地域連携推進室（現・地域連携推進本部）」の立ち上げ以降、地域との協働を進めてまいりましたが、その成果ともいえるような動きが、とくに近年活発に見られるようになってきました。

地域連携推進室から地域連携推進本部への格上げ（2021年10月）、国連世界観光機関 UNWTO への賛助加盟（2021年12月）、UNWTO が主催する「ベスト・ツーリズム・ビレッジ」プロジェクトへの美山町の選出（2021年12月）など、地域の活性化に資するような動きが次々と生まれています。今後も、さらなる地域連携・観光まちづくりの取り組みを行っていく予定です。

この冊子では、こうした種々の動きのキーパーソンである高御堂さん（南丹市美山観光まちづくり協会）と村上さん（神戸大学地域連携本部アドバイザーフェロー）へのインタビューを掲載しました。見開き2ページのささやかな冊子ではありますが、神戸大学の地域連携の萌芽を感じ取っていただければ幸いです。

Q 美山町と神戸大学は、どのようなきっかけで繋がったのか、経緯をお聞かせください。

私は美山町生まれで、国際文化学部（現・国際人間科学部）出身なのですが、卒業と同時にUターンで「南丹市観光美山まちづくり協会」で働きはじめました。神戸大学のなかでも、美山と関わりが深いのは国際人間科学部（以下、国人）ですが、国人との連携が始まったのがだいたい3年前ですね。恩師である井上弘貴先生と、辛島理人先生が、本格的に「観光まちづくり」研究に力を入れている時期でした。

協会の業務でフランスに営業に行く機会があり、そのとき通訳をお願いしていた方のご縁で辛島先生と繋がりができました。2019年の春頃に辛島先生から大学での講演のオファーを頂いて、講演をきっかけとして大学と関わるようになりました。その後、コロナが流行して、学生たちが海外研修（留学）に行けなくなり、井上先生から「なにか代替プログラムを国内で組めないか」という打診があったんです。そのような経緯から、2020年以降、いろいろなプログラムを共同で組むことになりました。

Q 大学との活動としては、具体的にどのようなものがありますか？また、大学との活動は地域側にどんなメリットがありますか？

■ 観光商品の企画・造成セミナーの開催

今年の1月末に美山にて、「一棟貸し古民家の活用を考える美山セミナー」と題したモニターツアーを開催しました。近年、美山には一棟貸しの古民家のお宿を営む方が増えてきていて、その活用可能性を学生と一緒に探ろうという企画です。辛島先生の発案でした。

現役神大生、美山の事業者をはじめ、旅行業や行政で働く卒業生、観光関係の企業の方々などが集まって、発表や議論を行いました。参加した一人の若い事業者の方が、「大学生による新しい視点のプレゼンテーションを受けることができ、いい刺激になった」と回答していて、美山側にもポジティブな反応が見られました。

■ ラーニングツーリズム × 大学との連携

また、神戸大学のGSP（注1）に刺激を受けて、美山では「ラーニングツーリズム」というコンセプトのもと、美山に研修に来る学生へのプログラム造成に取り組んでいるところです。観光庁の実証事業として「第二のふるさとプロジェクト（注2）」というものがあるのですが、美山はその実証地域として選ばれました。そうしたなかで神戸大学と連携して実施体制に入ってもらい、助言をしてもらっているという状況です。

●(注1) GSP…グローバル・スタディーズ・プログラムの略称であり、神戸大学国際人間科学部の学生全員が参加する、実践型の教育プログラム。学生自身の関心に基づいた様々な海外・国内のフィールド学習を通し、他者と協働しリーダーシップを発揮することで、グローバル社会における課題解決を目指している。

●(注2) 第二のふるさとプロジェクト…観光庁を中心に、「何度も地域に通う旅、帰る旅」というキャッチコピーのもと始まったプロジェクト。国内需要の創出、および地域経済の復興のため、地域を「第二のふるさと」とし、そこでの新たな旅のスタイルの普及・定着を図っている。

通常の団体旅行のプログラム造成とは異なり、学生にどのように学びを深めてもらうか、再訪いただくにはどのような仕掛けが必要かといったことを、実際に教育の場にいらっしゃる先生にご助言をいただいたり、事前学習で丁寧に美山を取り巻く状況を学生に指導いただけることは非常にありがたいです。また、GSP オフィスの篠原先生をはじめ、丁寧な学生のサポートをしていただくことで、地域の方も安心して受け入れができます。

Q GSP の研修内容を教えていただけますか。また今後、神戸大学とやっていきたいことがあればお聞かせください。

■ 地域の人へのインタビュー／紹介記事の作成

GSP では夏と冬の年2回、学生と地域の交流の場を設けています。このプログラム内で学生が地域の人にインタビューする機会があります。学生さんにとっても地域を知る良い機会なのですが、美山側にとっても思わぬ発見があったり普段考えないようなことを考えたりできる貴重なチャンスになっています。

たとえば学生さんから「今後（地域や事業を）どうしていきたいですか？」などの質問を受けることによって、「どうして美山に来たのか」「自分たちの仕事はどういうものなのか」「誇れるポイントはなにか」という根源的なことを振り返る機会になるんです。

ちなみに今夏のプログラムでは、地域を人の紹介記事を、学生に事前に作成してもらいました。美山を訪れる人に美山の魅力を伝えるにあたり、学生の皆さんの「外からの視点」で記事を書いていただければ、我々だけではできないことでもあります。

■ 学生と事業者が協力して課題解決に向かう

学生サイドとしても、いきなり「地域の人にインタビューをしてください」と指示されても、誰に何を聞けばいいかわからないと思います。ですので、事前にネット等で人と地域を調べ、記事を作成することは意味があるはずです。そのうえで美山に来てもらうことで、円滑で深いコミュニケーションが可能になり、一緒に課題解決に向かっていくことができると期待しています。この「学生と事業者が一体になって解決に向かう姿勢の実現」こそが第二のふるさとプログラムで行いたいことですので、今後もその方法を神戸大学と一緒に模索していきたいですね。

高御堂和華（たかみどう・わか）

京都府美山町（現南丹市）出身。2012年神戸大学国際文化学部入学、シェフィールド大学都市計画学部へ交換留学し、16年卒業。大学時代、スタートアップ企業のインターンシップに参加し、美山のツアーを企画した経験などから、一からすべてを創り上げることや故郷美山の魅力に気付く。卒業後、一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会に就職。18年から同協会事務局長を務める。

地域を担う人材を育てる

Q まずは簡単にご経歴と神戸大学に来られた経緯を教えてくださいいただけますか。

はい。神戸大学に今年の6月16日付で着任しました村上です。元々は神戸新聞社で記者をやっていて、最後は執行役員姫路本社代表として管理職として働いていました。定年退職をしようと思っていたところ、急逝した前任者の後を継ぐことになって神戸大学に来ました。ですので、神戸大学のことはまだ勉強中です。地域連携本部のアドバイザーフェローというお仕事させてもらってるんですけど、今日は正確な話というより、私の経験や考えも含めてお答えできる範囲でお答えしたいと思います。

Q 地域連携推進本部は大学内ではどのような役割をもっていて、地域のためにはどのような存在になり、どのような視点が求められるのでしょうか。

この組織はもともと、神戸大学の研究成果を域社会に還元すること、地域を担う人材を神戸大学が協力して育成しようということ、さらには色々な地域課題、地域社会が大きな変化をしている時代の中で、課題を解決するのに神戸大学の知見を役に立ててもらうことを目的として設立されています。2003年に設立され、地域連携推進室から昨年十月に地域連携推進本部という形に格上げになりました。

Q 村上さんが以前に書いた記事のなかで「関係人口を増やすには、まず地域の魅力を伝えなければ。若者の流出先の首都圏で、「播磨」は知られていない。情報発信こそ自治体間でもっと連携した方がいい」とあったのですが、地方の魅力を伝えるためにどのように情報発信をすればよいか、あらためて考えを教えてください。

■ SNS活用時代にこそ、伝えるべき「地域の魅力」に向き合う

そうですね、難しいですね。地域の情報発信ってなかなかできていなくて、兵庫県の情報を兵庫県外に届けるって非常に難しいなあと感じていますね。

それをどうやって伝えるかなんですけど、私は長く新聞社にいたので、新聞やテレビ等のマスメディアで報道されるのが一番だとずっと思ってきました。しかし、今はもう新聞の読者は減っていますし、テレビを見ない人も増えています。SNSなどの新しいツールを使わないといけないというのは一つ大きな変化だと思うんですけど、ツールよりもまず、「地域の魅力って何か」ということを改めて発掘する必要性を感じています。

地域の人って、意外と自分たちの街の魅力に気づいてない場合が多いんです。子供の時からずっとそこに住んでいるので、景観や資源が街の個性なのかどうか気づきにくいんですね。私も姫路に着任してすぐの時期は姫路城しか知らなかったんですけど、播磨地域には姫路城以外にも山城がたくさんあったりとか、古い町並みとか、例えば、「銀の馬車道」は昔、生野銀山から姫路港まで銀を運んでたんですけども、そういう沿線には古い町並みが残っていたりするんです。

地域の人たちは当たり前だと思ってるのが外から見ると凄く魅力を感じるわけですね。そういう魅力を発掘するのがまず大前提だと思います。それは地域の住民だけではなかなか気づきにくいので、例えば神戸大学の学生さんたちが、そこに行ってこんなことがあるのっていう驚きや魅力を外部の目から見て気づいてあげて、それを逆に地域の人に教えてあげるといったことは大事なかなと思います。

Q 村上さんの視点から今後神戸大学側として、連携していきたい地域があれば教えてください。そして、選択した理由があればお聞かせください。

■ 姫路・播磨地域との連携

兵庫県は全体的に魅力ある地域が多いので、いろんな地域と連携してほしいです。けれども、なかなかそうは言っても優先順位をつけないと一度にはできません。今は神戸大学が地域連携協定を結んでいる自治体がいくつかあり、丹波市、篠山市、朝来市、西脇市、加西市、南あわじ市、それから神戸市と結んでいます。地図を見ると分かるのですが、姫路や播磨、但馬は空白地帯となっています。神戸大学が阪神間に立地しているのでどうしても東の方に偏ってるんですけども、私が姫路で勤務していたこともあって姫路・播磨地域ってまだまだたくさん潜在能力があると思っていますので、これから連携していけたらいいかなと考えています。

ところで神戸大学って、姫路にゆかりがあることはご存じですか？いまの国際人間科学部や文学部の前身は姫路高等学校で、神戸に移転する前は姫路にあったんです。それも姫路・播磨地域に目を向ける理由の一つですね。神戸大学は丹波市や篠山市とも農学部を中心に連携してますけれども、農学部の源流が篠山の兵庫県立農科大学だったということで、神戸大学が拠点も設けて学生が活動しているんですね。将来的には姫路・播磨地域にも、学生さんたちが交流できる拠点を設けて、そこを中心に活動を広げていき、地域での神戸大学の存在感をもっと少し高めてもらえたらいいなと、個人的には考えています。

Q 現在では地域連携推進本部の一員でもあり、そして元神大の学生の一人として神戸大学には観光・まちづくりに関して将来どのように取り組みをしてほしいとお考えですか。

■ グローバルな視点を持ってローカルに活躍する人材を

神戸大学に期待するのはやっぱり地域を担う人材を育てることですね。神戸大学の学生さんは優秀なので企業に就職されたり海外に出て活躍されたりすると思うんですけども、地域でもグローバルな視点を持ってローカルに活動する人材を育てていただいて、地域を支える人材を育成していただきたいですね。

村上早百合（むらかみ・さゆり）

愛媛県今治市出身。1984年、神戸大学経済学部卒業。男女雇用機会均等法の施行前には珍しかった男女同一賃金、同一待遇という求人票を見て、神戸新聞社に入社。経済部記者や論説委員など約30年間、記者を経験。最も印象に残っているのは阪神・淡路大震災で、防災・減災の重要性や復旧、復興過程で地方主権の必要性を痛感した。今後は新聞社で培った経験や人脈を生かし、大学と地域のつなぎ役を果たしていきたい。

FOR TOURISM EXPO 2022

神戸大学 地域連携・観光まちづくりの「これまで」と「これから」
神戸大学国際人間科学部グローバル・スタディーズ・プログラム
GSP 研修型（国内）「ツーリズム EXPO ジャパンで観光を学ぶ」
●協力：神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート地域連携センター
●制作メンバー
上田秀賢
岡本なつみ
Thaw Tar Htin Aung
中北将吾
長谷川舞香
古川慎一郎
2022年9月22日